

「経済」の支配から抜け出し 数値化されない「脱成長」の道へ

中村富美子

なかむら ふみこ / ジャーナリスト

「経済」の支配から抜け出し
数値化されない「脱成長」の道へ

私 たちはいま全体主義の中
にある。と、本書は明快
に世界をデッサンする。

それは「経済」の全体主義で
ある。際限なき成長を本質とす
る経済活動が、社会のすべてを
支配している。この体制を支え
ているのは、経済学的にしか世
界を捉えない認識の在り方だ。
文明的に問うならば、西洋近
代的な知と言っている。

これを批判的に解体し、経済
の帝国主義から抜け出せ、そし
て経済を本来あるべき社会関係
の中に埋め込め、と本書は説く。
緑の資本主義や善き経済成長
といった欺瞞をかわし、エコロ
ジカルな社会主義の原理へと向
かうこの道を、著者は「脱成長」
の道と名付け、「簡素な豊かさ」

という新たな幸福のパラダイム
を提起する。それは現行の経済
学では数値化されない幸福や豊
かさだ。

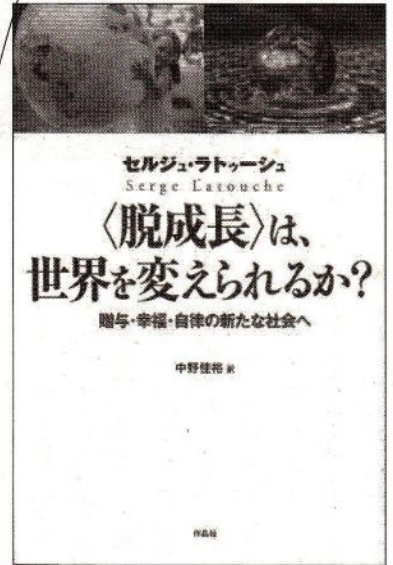
ろうそくの時代に戻れという
のか、と誤解もされる概念だが、
脱成長とは科学技術のやみくも
な否定でも、単なる禁欲の勧め
でもない。むしろ地中海的な食
文化に通じる、分かち合う社会
の喜びを称えるものだ。

カストリアデイスの言葉を借
りれば「新しい車を買うより、
新しい友人を持つ幸福」。現に
私たちは気づいている。経済成
長優先社会の幸福は、結局のと
ころ、より多く働きより多く
消費することではしかない。
脱成長の道はこうして単一な
経済学的規範から抜け出す倫理

学でもあるが、同時に「政治的
なるもの」の再生も意味する。
民衆が政治の行為者となり、社
会の中で経済を自主管理する政
治性の復活だ。それはコモンズ
(公共の物、共同体空間、共有
財産)の奪還でもある。

イタリアから始まったスロー
フード運動がきわめて「政治的」
なもの、この意味である。サバ
ティスタのような先住民の運動
も含め、すでにローカルに根差
した「経済からの脱出」はそこ
こで始まっている。

経済のコノテーションを持つ
英語圏には、フランス語の脱成
長にある肯定的な「悦び」を含
意する単語がないという。象徴
的ではないか。
翻訳できない固有の言葉、そ



『〈脱成長〉は、世界を変えられるか? 贈与・幸福・自律の新たな社会へ』
セルジュ・ラトゥーシュ=著 中野佳裕=訳 作品社
2520円 ISBN978-4-86182-438-8

れぞれの地域の固有の文化を通
じて、世界を複数的に再構築し
ていく。単一な経済学から抜け
出す脱成長の概念の豊かさは、
まさにそこにこそある。

さて、日本ではどうだろう。
フクシマの悲劇を経験しなが
らなお経済の名において原発を
推進し、旧態依然の経済成長論
でしかない「アベノミクス」が
幻想を振りまき続けている。

現実政治どころか、大半の
人々の暮らしの現実から乖離し
たこの日本の政治状況下だから
こそ、本書を読む意義は増す。
巨大な投資を必要とする上に
地球や人命の汚染を数値化すれ
ばどれほど高くつくかわからな
い原発は、経済合理性にさえ適
われないことが今回の事故で明ら

かになった。それでもなお「経
済か廃炉か」といった論理矛盾
を錦の御旗にする政官財界。こ
こで「経済」の名において推進
されている「政治」は、単なる
利権の構造にすぎない。

現在も進行中の悲劇によって
私たちが知ったのは、もはや原
発は経済の語ではなく、生命と
幸福の語で論じるべきだという
事実であり、実感だ。脱成長の
道とは政治的自律性を獲得する
道だと語る著者の言葉が、この
現実に響く。

いまこそ、私たちの手に政治
的なるものを再生させるときだ。
3・11後の日本に生きる私たち
は、今、そういう場所に立って
いる。脱成長の道を通して、本
書はそう語りかけてくる。